〔近世事物考〕おいらん。

今新吉原町にて、揚代高き妓女をおいらんといへり、こは元祿年間、吉原仲の町へ、女郎銘々より櫻を多く植たるに、其頃岸田屋何某の禿の句に、おいらんがいつちよく咲櫻かな、此意は、俗においらの姉女郎の植し櫻が、いちばんよく咲たりと、ほこりたることなり、おいらといふべきを、此俚言においらんとなまりていひしなり、此時より太夫の名に成たり、されば其召つかはるゝ者より云ふべき詞なるを、他よりいひては義にたがへれど、今は誰もおいらんといふなり、

〔松屋筆記四〕オイラン、松位、大夫などの義、

新吉原の遊女にオイランといふ號あるは、もと新造、禿などが、おいらの所のあねさんといふべきを、オイラントコ〳〵などいひ、さて略てオイラン〳〵トいひならへりし也、さるを今は他の人よりもオイランとよびて、遊女の美稱とす、

〔倭訓栞中編於三十〕おやま　賣女をいふは、面に粉をもて山を作る意成べし、西土にも粉頭といへり、

〔異本洞房語園上〕或曰、遊女をよねといふ、宿の字なるべしと、張文成の遊仙窟曰、賭宿、十娘問曰、若爲賭宿、下官答曰、十娘輸籌、則共下官臥一宿、下官輸籌、則共十娘臥一宿、遊女をよねといふは、寛永の頃、羽州坂田に、よねといひし遊女、生所は加州の者、琵琶の上手にてありし、このよねより、よき遊女を見てはよねと呼て、總て遊女の別名になりたり、又坂田あたりにて、遊女の事を柄杓とも云、流を汲といふ意が、右にいふ遊仙窟の宿の字は、事を好てむつかし、

〔屠龍工隨筆〕遊女を道の者といふ事、曾我物語に出、

〔湯土問答二〕問　源平ノ比、遊女トイフモノ、今ノ世トハ大ニカハレル事歟、小松大臣ノ伊豆守仲綱ノモトヘ馬ヲヌクルトテ、夕部陣外ヨリ傾城ノモトヘ通レシ時、用ヒラルベシトアリシ事見